



可能性として の不安



ヤマダヒフミ

可能性としての不安

*

本の読み方には二つのやり方がある。一つは、最初に結論を自分の中で出しておいて、その為の根拠付けとして本を読むということ。そしてもう一つは、様々な書物の海の中から、一つの統一的真実を発見するために、本を読むという方法である。前者と後者はよく似ているように思われるだろうが、これらは全く違う読み方である。

本を読むという事は一般的には役に立つ事だと言われているが、本を読むという事は最悪の害悪をもたらす事もあるし、良い事をもたらす事もある。それは、インターネットの「読み方」においても同様である。人は、自分の望んだ結果を根拠づけ、活気付けるためだけに、ただそれだけの情報を得る事もできるし、逆に、ネットに広がる広大な情報を自己の為に役立て、そこから一つの統一的真実——自分の人生に役立つような——を、見つける事ももちろん可能である。

本を読む、という行為が何故こんなに礼賛されるかというのは意味不明だが、おそらくは、テレビゲームや漫画といった新しいメディアが現れてきた事に対する、一種の保守反動かもしれない。だが、もちろん、私はテレビゲームもアニメも漫画もインターネットも、正邪共に含んだものである、と考えている。そしてどういうメディアでも、良い作品は良いのであり、そうした作品は社会に結果的には良い影響を与えるのである。

シェイクスピアがこんな事を言っている。「悪魔もまた自分勝手な目的の為に聖書を引用する。」（「ヴェニス商人」より）このたった一行に、悪しき本の読み方の本質は完璧に現れている。ヒットラーは、読書家だった。だが、彼に知性があったとはいえない。彼は自分の妄念と妄疾に決定的な形を与える為に、他者の書物を利用したに過ぎないのだ。

シオランは「書物とは他人を利用する一番、優雅な方法である」、といった意味の事を言っていたと思うが、ニュートンもまた同じ事を言っていなかっただろうか？・・・ニュートンは「巨人の肩」に載る必要を説いたのだった。巨人の肩・・・これを、本——あるいは知識と考えて、相違ないだろう。私達は別に一から考える必要はないのである。全ての書物とは、平積みされた過去である。過去を知れば、自分が何をせざるを得ないかもまた見えてくるだろう。

*

本を読む事で精神が豊かになる、と本気で思っている人がいれば、それは一度も真面目に本を読んだ事のない人だろう。無知な大衆であれば、大学ではさぞ高等な教育が行われていると思うかもしれないが、誰も、自分の中に身につけていないものを改めて身につける事は絶対的に不可能なのである。そして我々が最初に身につける事ができる最も本質的な教養とは、意欲なのである。

我々が知ろうと学ぶ時、初めて、様々な過去の先人の築いた知識が、有意義なものとして見えてくる。そうして、学ぶ事が始まる。〇〇大学に行った、〇〇という資格を取った、そうした事が先天的命題として浮かんでいる間は、人は教養の門口に立ってもいないのである。教養とは本質的に孤独なものであろう。そして、教養と知性の最も偉大な点は、あの屋根裏部屋のラスコーニコフのように、まるで浮浪者のようななりであろうと、またそんな境遇であろうと、自分の脳髄にこの全世界を上回る宇宙を所有できるという点にある。

*

マルクスは様々な資料を得て、そこから帰納的に自らの結論を導き出した。これは全く正しいやり方だった。だが、マルクスは自分が得た結論から推論し、さらに未来まで確定できると考えた。未来のユートピアを現実にする為に、マルクスの弟子達はこの地上を地獄に変えた。天国の看板を掲げて。

スターリンにせよ、ヒットラーにせよ、彼らはひとつの哲学を、まるで宗教における神のように高々と掲げた。ここで、一番知識があり、賢いと目されている人々があっさりと、彼らの新手の宗教に頭を垂れた。何故か？・・・この問いはまだ終わっていない。絶対的理性のもたらす悲劇について、その本質について、ごく少数の人々を除いて、人々は目をそらした。・・・だから、この問題は今もまだ終わっていないのである。

私達、日本の社会では「頭が良い」という言葉は褒め言葉として通用する。「君、頭が良いね？」と会社の上司が言えば、言われた方は褒め言葉として受け取り、「ありがとうございます」と返すだろう。だが、しかし、頭が良いとはどういう事か？・・・そしてまた、現代日本社会で頻繁に使われる言葉、「仕事ができる」「できる男(女)」もまた、殆ど絶対的な褒め言葉としてまかり通っている。これを言われて、悪い気のする人間はそうそういない。

だが、考えても見て欲しい。――私は人々にとって嫌な事を言うが――ナチスにとって、仕事のできる人間とは、「効率的にユダヤ人を殺す存在」だったのだ。・・・もちろん、私がナチスの内実をこの目で見てきた訳ではないし、書物やネットから得た知識しかないのだから、そこから推測して言っているには違いないのだが、しかし、そういう事はありうる、しかも「十分」ありうるのだ。

*

「我々の社会はナチスのそれとは違う。だからお前の言っている事は間違っている。」・・・そう言う人々の声が聞こえてくる。確かに。・・・だが、私が一番、問題としたい点は、そうした事ではない。私にとって一番、問題としたい事は、この世間一般で指標となっている言葉――「頭が良い」とか「仕事ができる」とかいった言葉に、指向性が全く見あたらないという点にある。

指向性とは何か。それはおそらく、ナチスが最も怖れていた点であろう。人が考えるのとは違って、全く残忍な犯罪や、恐ろしい人殺しやレイプといったものを、「社会的に」行うのに必要なものは、冷徹な精神ではない。そうではなく、我々の中での服従心なのである。

おそらく、戦争のさなかにあつて、沢山人を殺した人間には次のような言い訳が許されるかもしれない。「もし、私が殺さねば、私が殺されたのです。・・・どうして他の選択肢が選ばれたでしょう?」。あるいは、これはまだ良心的な回答だろう。最も、透徹していると思われる答えは次のようになるだろう。

「私は殺せと命じられたから、殺しただけです。私は社会に命令されたから、そうしただけです。私は誰よりも働きました。だから、誰よりも殺したという訳です。」

そして、我々の社会が一体何を厳命するのか?という点に対して、知性が監視するという重要な点はおそらくもうとっくに(あるいは最初の段階から)忘れられ、問題は社会の厳命をいかに的確に遂行するか?というだけになったのだ。

*

妙な事の一つ言おう。それはエリートと天才の大きな相違である。・・・この二つは、はじめは些細な差、あるいは天才の方が愚か者に見えるかもしれないが、時間というクロマトグラフィーがこの両者を綺麗に分離する。つまり、エリート(優等生)というのは社会の作った枠組みを決して超える事はなく、あくまでもその枠内で結果を出すのだが、天才というのはその枠組みそのものを破壊し、次の扉を開くのである。

私が考えているのはマルクス主義である。あるいは、社会主義、共産主義、である。この極めて頭脳的な枠組みを持った「完璧な」思考性というのはまさしく、エリートや優等生、頭脳そのものは極めて優れているものの、決して独創性も、良き破壊性も、それに次がなければならぬ創造性も持ち合わせていない人々が持ち出したものではないのか、という事だ。

私が何故これほど、過去の遺物とも目されているマルクス主義から共産主義に至る道程を気にしているかについて、何となく気になるという人も、現代人を読者に想定するならば、当然いるだろう。だが、私にとって、これはビビッドな問題であり、それは先に言った「頭が良い」とか「仕事ができる」といった言葉だけが一人歩きしている社会においては妥当な問題意識であるとさえ、私は思っている。

さて、社会主義的国家においては、必然的な真理、絶対的に動かせない哲学的命題、その答えというものがあつて、全ての人民はこの答えの回りを、まるで太陽の周囲を回る惑星のように運動してゆくのだが、実際の所、ここで最も権力を持つのは、「太陽の光を伝えると言われているある人間」である。彼は人間なのだが、神の言葉を聞き、その託宣を下々に教えるにあたっては、神同様である。

不思議な事だが、我々が全会一致で出した答えが正しいとは限らない。我々にとって、我々自身の可能性は未知なのだが、また同時に我々の不可能性もまた未知である。だが、人々は、容易にその事を忘れてしまう。人は、まるで痴呆症にかかったかのように、「その内部にいた時の実在感」を忘れてしまうのである。・・・そして、あの時は病気があつた、と軽々しく結論し、そして何ら反省する事も学ぶ事もなく、次へと進み、同じ過ちを繰り返すのである。

現代社会に戻ろう。指向性について。

*

現在――二千十二年末の事を差すのだが――では、我々は安定と安寧を求めているように見受けられる。それは

近い将来に必ず変革するだろうが、とりあえず今の段階ではそのように思える。

こうした安定と安心を求める心というのは、もちろん枠組みを求める。人は、自分達の生に対する確固とした保険を、保証を必要とする。だが、もちろん、この流浪の生において、確固たる担保などない——という事を人は容易に忘れる。だから、人は様々な形式を固定化し、そしてその形式に沿って運動する。そしてここに、おそらくは戦時などには見られない、平和の内においてのみ育つ様々な腐敗が現れてくる。なぜなら、誰もが定式化と、枠組みを求めているから、その枠組みさえしっかり見せかけさえすれば、何をしようが勝手だからである。・・・たとえば、国家公認という枠組み、レットルが非常に重要だと誰もが考え、そしてそれに対する否定生を喪失されている社会においては当然、この国家の方で好き勝手暴虐を加える、というのは、ごく自然とも考えられるからである。

こうして、人が安定を求めるという現代の心象が、全体の枠組みへの依拠と、それに伴った、それ自体の不安定性という事態を招くのである。

*

この社会というのは指向性を欠いている社会と言えるだろう。指向性というのは——咄嗟に思いついた言葉だが——この社会全体が依拠している枠組みに対する疑いの眼差しを向け、そして正しい方向性を「考えようとする」とでもいったようなものである。

先に言ったように、この世界に汨濫している「頭が良い」「仕事ができる」「勉強ができる」「ノウハウ」「スキル」、あるいは資格や成績といったものでも良い——あるいは、例えば、「彼女」がいる、友人が多い事に価値がある、といった価値観——そうした全てに、私は何となく不安を覚える。それらは、最初から、檻に繋がれている印象を受ける。そして檻につながれ、その中を上下して、「勝ち組」だの「負け組」だの、ニートだのフリーターだの正社員だの年収がいくらだの・・・そうした罵り合いはするものの、結局、その内の誰一人として、この檻の外を構想する事はできないし、禁じられている。我々は井戸の中にいるが、誰も井戸の外に出ようとはしない。可能性とは不安の別名である。我々が外に出る時、不安を覚えるのはその為である。

さて、この小論も——論とも言えないが——もようやく終わりに近づいてきたようだ。・・・我々の世界は一つの絶対点に達しようとしている。(あるいは、もう達したのかもしれないが。)我々はこの世界から宗教を排した。だが、絶対性というのは、また別種の形で我々の手に舞い戻ってきた。我々が日々感じる不安とは一体、何だろうか?・・・自分が存在する事を止めてしまえば、それで全てが終わりである、という冷徹な事実は、我々を不安に駆り立てる。親はしばしば子供の中に、自らの叶えられなかった夢を見ようとする。だが、その子もまた、親と同じ願いを持ちつつ、結局自らの不安から逃れられず(そして夢も「叶えられず」)死ぬのかもしれない。・・・我々は我々が生きているという不安に取り囲まれたままである。

現代社会は一つの答えを見つけようとしている。それはポジティブなものではないかもしれないが、結局、人間は自らの不安を振り返って見つめるより、それから逃れる方法を選ぶものだ。・・・資本主義が我々に用意した様々な答えでは、おそらくもう答えとしての機能は失われてしまっている。それらでは手に負えないくらい、我々の不安は根源的で、背後に迫っている。(そして、ここにまた全体主義が復活する余地が見いだされるのだろう・・・。)

これに対する解決方法はおそらくないのだが、次のようには言えるかもしれない。すなわち、もし人が、今のように、(そしてこれからそうなる気がするが——)安易な解決を求めるなら、問題はこれからもっと増大するだろう事。ラスコーリニコフは、「今」の問題を解決する為に、一つの殺人事件を起こし、それによってさらなる最悪の境地に追い込まれたのだった。そしてその逆に——逆と言って良いだろう——賢人であるゲーテや、ソクラテスにとっては絶えず、自己に謙虚である事が常に自分自身によって求められていた。・・・彼らは、私達の考えるように、最初から安定した、確固不拔の知性だったのではない。彼らの中には絶えず不満と不安がつきまどっていたに違いない。彼らの内側に安寧はなかったと言ってよい。そしてそれだからこそ、後生の我々からは、あれほど確固として揺らがない知性の姿となったのだ。この事は、全く矛盾した事柄ではない。ゲーテは言う。「人は努めている間、迷うものだ」と。